

聖書：ヨハネの黙示録 20：11～15

説教題：いのちの書に

日時：2021年10月3日（朝拝）

このヨハネの黙示録は、世界の歴史はどこへ向かっているかについて私たちに語っています。この世界はいつまでも今の状態のまま続くのではないこと、この世界を今日も支配している主権者は神であること、その神は歴史の最後に地上でなされたすべての悪に最終的なさばきを下されることについて語っています。すでに獣、偽預言者、サタンのさばきが前回までの箇所でも語られました。10節：「彼らを惑わした悪魔は火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいる。彼らは昼も夜も、世々限りなく苦しみを受ける。」さて歴史の最後に行われるさばきはこれだけではありません。この世界に生きたすべての人一人一人に対するさばきもある（最後の審判）ということが20章最後に記されています。

ここでヨハネは「大きな白い御座と、そこに着いておられる方」を見ました。御座については4～5章に出て来ました。4章2節：「たちまち私は御霊に捕らえられた。すると見よ。天に御座があり、その御座に着いている方がおられた。」そこでの「御座に着いている方」は神でした。ですから今日の箇所でも御座に着いておられる方は神を指すと考えられます。座とは世界と宇宙を支配する座のことであり、また最後のさばきを行う座のことでしょう。その座について今日の11節に「大きな白い御座」と言われています。「大きな」とはこのさばきの座の特別な権威を示すものでしょう。また「白」は黙示録ではきよさの象徴として用いられて来ました。そのさばきは汚れがなく、公正なものであることを暗示します。この最後のさばきの御座の描写で思い起こすのはダニエル書7章9～10節です。「私が見ていると、やがていくつかの御座が備えられ、『年を経た方』が座に着かれた。その衣は雪のように白く、頭髮は混じりけのない羊の毛のよう。御座は火の炎、その車輪は燃える火で、火の流れがこの方の前から出ていた。幾千もの者がこの方に仕え、幾万もの者がその前に立っていた。さばきが始まり、いくつかの文書が開かれた。」

さてヨハネはこの方の前で「地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった」と語ります。これまでも同じような描写がありました。6章14節にやはり最後のさばきの日の描写として「天は、巻物が巻かれるように消えてなくなり、すべての山と島

は、かつてあった場所から移された」とありました。16章20節にも「島はすべて逃げ去り、山々は見えなくなった」とありました。そして確かに次回見る21章1節に「新しい天と新しい地」の出現に伴って、「以前の天と以前の地は過ぎ去った」と言われます。悪によって汚れたこの世界はそのまま継続することはできません。天国と相容れないものはさばかれ、過ぎ去るという事態が生じます。そしてこの状況を実際にイメージすると、私たちにとって大変なことを意味するように思います。それは地と天が逃げ去ることによって、そこに残されるのは神と私たちだけになるということです。私たちはどこかに隠れたり、他のものに関心を向けることはできなくなります。大きな白い御座に着いて、これからさばきをされる神と真正面から私たちは向き合わされるのです。これは何と厳粛なことでしょう。私たちはその準備ができていますか。

この神の前にすべての人が立たされるというのが12～13節です。12節に「死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っている」のを見たことがあります。死んだ人が立っているということは復活させられたということです。聖書は復活のからだを受けるのは救われる人ばかりでなく、救われない人もだと語っています。ヨハネの福音書5章28～29節：「墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。」ですから全員復活させられるのです。「大きい者も小さい者も」です。この世では人々の間に色々な違いがあります。人の目に偉いと思われている人とそうでない人、上の立場にある人とそうでない人、裕福な生活をした人とそうでない人、周りから称賛された人とそうでない人。しかしそれらの違いはさばきの日に関係がありません。一国の王も大臣も、大企業の社長や大学の学長も特別扱いされず、この世における最も小さい者と一緒の列に交じって神の前に立たされるのです。

13節もそれを強調するものでしょう。そこに「海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。」とあります。「海」は黙示録で人間にとって脅威的な場所、また悪の源泉というイメージで語られて来ました。この海から13章で獣が上って来ました。その不気味な海で亡くなった人もいます。通常、陸上で死んだ人は陸上の墓に葬られるでしょうけれども、海に飲まれて死んだ人はどうなったかわかりません。その体は回収されません。従って葬ることができません。しかしやが

ての日に、海はその中にいる死者を出すと言われています。つまり最後のさばきから逃れられる人は一人もいないということです。どこに行ったか分からないような人も、やがての日には復活させられて確実に神の前に立たされる。死とよみも同様です。そこは悪魔が長らく支配して来た場所です。しかしその中にいる死者も全員吐き出され、一人残らず神の前に出頭させられる。この世界に存在した人で、最後の審判を免れる人は一人もいないのです。

ではそのさばきはどのように行われるのでしょうか。12 節に「数々の書物が開かれた」とあります。先ほど参照したダニエル書 7 章 10 節にも、「さばきが始まり、いくつかの文書が開かれた」とありました。その文書、書物に記されていることは何でしょうか。12 節後半に「死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた」とありますので、その人の行いです。地上での生活のありようすべてです。ではこの書物に書いたのは誰でしょうか。それは神様でしょうか。もちろん神はこのような物質的な書物がないと、私たちの地上の行いを思い起こせない方ではありません。ですから数々の書物は全能者である神の記憶を象徴するものかもしれません。また神は私たちのすべてを見ておられます。ヘブル人への手紙 4 章 13 節：「神の御前にあらわでない被造物はありません。神の目にはすべてが裸であり、さらけ出されています。この神に対して、私たちは申し開きをするのです。」 神が誰も見ておらず、誰も知らない私たちの行いもすべて見て知っておられます。また行いだけでなく、あらゆる言葉も、また心の内で抱いた思いもご存知です。そのすべてがこれらの書物に記されています。その書物がかの日に改めて開かれて、その一つ一つが読まれ、取り上げられるとは何と恐ろしいことでしょうか。私たちはそれらについて申し開きをしなければならないと言われています。ヘブル人への手紙 9 章 27 節に「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」とありますが、死後に待っているさばきはまずこのようなプロセスを含むのです。

その結果、神の前に正しく歩まなかった者、神の律法に違反した者に対する報いは火の池に投げ込まれることであると 14～15 節にあります。14 節最初の「それから、死とよみは火の池に投げ込まれた」とはどういう意味でしょうか。死とよみがどのように滅ぼされ、この世からなくなるということでしょうか。これはおそらく、この日まで人々を閉じ込めて来た死とよみは、これ以降は火の池に取って代わるという意味かと思います。死とよみは、この後の表現から考えると第一の死と関係しますが、こ

の最後の審判の日をもって、第一の死は第二の死へと移行するのです。より恐ろしい最終的な死へと置き換えられるのです。火の池は、最初に読んだ 10 節にあった通り、獣や偽預言者、サタンがいるところです。先週も述べましたように、サタンは霊的な存在ですから、このさばきの本質は物質的な火の池に投げ込まれて肉体的に苦しむというものではありません。これは霊的な苦しみとさばきの下に置かれることの象徴的表現でしょう。また「昼も夜も、世々限りなく」と言われていた通り、それは永遠に続くものと考えられます。それと同じ状態へ投げ込まれるのです。ですからさばかれる人は、最後の日に肉体をもって復活した後、火の池に投げ入れられて一瞬で死ぬ、それ以上は体が持たないはずであると考えすることはできないと思います。そこで待っているのはサタンや獣や偽預言者と同じような苦しみです。その彼らについて来た者たち、その彼らの側について来た者たちとして、同じ苦しみをともにすることになるのです。

しかし 15 節にはこうありました。「いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。」これによれば、いのちに書に記されている者は火の池に投げ込まれない。その者はこのさばきを免れる。12 節に「数々の書物」とは別に、書物がもう一つ開かれたこと、それは「いのちの書であった」とありました。これもダニエル書が示していました。ダニエル書 12 章 1~2 節：「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる。ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」ここにも永遠のいのちに入れていただける者の名が記されている別の書があることが語られていました。この「いのちの書」とはどういう書なのでしょう。なぜこの書に名が記されている人は最後の審判における「火の池行き」から守られるのでしょうか。このいのちの書については、すでに 13 章 8 節に出て来て、そこではより十分な名称で語られていました。「屠られた子羊のいのちの書」と。つまりこの「いのちの書」は、屠られた子羊と関係し、その屠られた子羊と関係ある人の名が記されている書ということになります。その書に名を記されている人も、その人自身でだけ考えるなら神の前に罪ある者です。さばかれるべき沢山の罪を犯して来た者です。しかしその行いに基づくさばきを受ける必要はありません。なぜなら子羊が代わりにそれを受け、苦しんだからです。ご自身が屠られ、いのちまでも投げ出し、その代価を十二分に支払ったからです。ですから屠られ

た子羊と結ばれている者は、もうさばきを受けなくて良い。地上で犯した罪に対するさばきはすでに清算済みの者として、火の池に投げ込まれる必要はないのです。むしろ罪の問題を処理された者として、また子羊キリストの完全な義の生涯が転嫁された者として、永遠のいのちを受け継ぐ者とされる。ですからいかにこの「いのちの書」「屠られた子羊のいのちの書」に名を記されていることが、最後の審判の日に私たちにとっての唯一の希望であり、また救いであることでしょうか。

私たちはどうしたら良いでしょう。私たちは自分でいのちの書に自分の名を書き込むことはできません。その書に名を書くのは神です。では神はいつ書くのでしょうか。先に参照した13章8節に「世界の基が据えられたときから、屠られた子羊のいのちの書にその名が書き記されて」とありました。つまりそれは永遠の昔に！ということになります。そうであるなら、私たちはこれについてどうすることもできない、私たちは何もできないということになるのでしょうか。聖書はそうは言いません。神は聖書を通して、イエス・キリストのもとに来なさい！屠られた子羊を信じなさい！と言っています。イエス様も「すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい」とすべての人を今なお招いています。また「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません」と確約しています。ですから私たちのすることは神の招きに従ってイエス・キリストのもとに行ってこの方を信じることです。そしてそのことをした人が、後から実は自分はいのちの書に名を記されていたということに感謝をもって知るようになるのです。私たちにとっての順番は常に今述べた通りです。先に自分の名がいのちの書に記されているかどうかを確かめることはできません。神の永遠の御心をあれこれ詮索して、どうも自分はいのちの書に名が記されているようだからキリストを信じよう！という順番はあり得ません。私たちのすべきことは、神の招きの言葉に聞いて、屠られた子羊キリストを自分の救い主として信じることです。そうする人は決して救いに漏れません。私はキリストを信じたのに、いのちの書に名がなかったために天国から退けられた！という人は一人もいないのです。むしろその人は子羊を信じて初めて、実は自分はいのちの書に名を記されていたのであり、すべては神の一方的な恵みのお取り計らいの中でこのように導かれたのだと知るようにされるのです。

今日の箇所は歴史の最後にすべてが明らかにされる日が来ると告げています。地上に生きた全員が死後、復活して御前に立たされ、地上の歩みのすべてについて、数々

の書物が開かれて、問われる日が来る、と。果たして私たちはその日、神だけを前にしながら、立ち続けることができるでしょうか。その日の唯一の望みは、自らの名がもう一つの書、「屠られた子羊のいのちの書」に書き記されていることです。そうであるために私たちに今ここで命じられていることは、神が備えてくださった屠られた子羊に信頼し、このお方を主とする生活へ進むことです。その人は最後の審判の日に、いのちの書に名が記されている人として、燃える火の池に投げ込まれて自らの罪の刈り取りをすることから守られます。その人がより頼むキリストがすでに十分な身代わりを果たし、代価を払ってくださったからです。そしてただ神の恵みによって、今の世の一切の罪と汚れが取り除かれた約束の救いの世界、次回以降語られる新しい天と新しい地に住む者へと導かれるのです。